

東亜工業株式会社 様

アメリカ新工場設立を契機に、 日米で使えるグローバルなシステムを

東亜工業は、「自動車」と「住宅」という二つの事業を柱に据え、両分野において高い技術力を誇る会社です。自動車のボディーおよびサスペンション関連部品の製造を手がける自動車部門は、米国進出を機に、日米両工場で使用可能なシステムとしてIFS Applicationsを選択しました。2002年には米国インディアナ州で、そして2004年には日本の本社工場で会計、生産管理、販売物流のシステムが稼働を開始しました。

東亜工業が新システム導入について検討を始めたのは1999年のこと。3年後の2002年に操業を開始する米国の新工場と、



齋藤邦和 様

2003年に予定されていた本社工場のシステムリニューアルを睨んでのシステム検討でした。新システムに求められたのは、日本語および

英語の環境で使用可能なこと、自動車部品業界に適應できること、日本での追加機能開発が可能で、導入後のサポートは日米両国で受けられることなどでした。複数のベンダーからの提案を検討した結果、NEC社とNECTータルインテグレーションサービス(以下NTIS)社が共同提案したIFS Applicationsの採用が決定しました。

導入作業もこの2社の共同プロジェクトで進められました。自動車事業部企画管理部長の齋藤氏は当時を振り返り、「NECとNTISのメンバーは、IFS Applicationsに精通しているだけでなく、自動車業界の知識も非常に豊富でした。そして何より、他のどのベンダーより先やる気が感じられ、彼らになら安心してシステム開発を任せられることができると思いました」と語っています。

2002年に米国での導入が一段落し、すぐに日本でのプロジェクトがスタート。生産・販売系のシステムは、日米それぞれの工場で製造している製品がほぼ同様のものであることから、米国のシステムの50%以上



を日本でも使用することができました。日本での課題は、今まで独立して稼働していた会計システムと生産・販売システムとの連携でした。導入にかかった時間は約1年半。会計システムは昨年4月に、生産・販売システムは7月に稼働を始めました。

「ERPの導入で、二重入力の手間が省け、作業が合理化されました。とはいえ、社員はやっと新しいシステムに慣れたところですが、今後は、システムの完成度をさらに高めながら、組織体制の見直しを図り、人・モノ・金・設備といった企業の資産すべてをタイムリーにお金に換算できる本来の経営管理を行うことがひとつの目標です」と齋藤部長は経営力の強化に意欲的です。「共育道場」と呼ばれる独自の人材育成方針で「人財」を育む東亜工業。質の高いマンパワーと新システムでさらなる成長を目指します。